

8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7

鳴門中津物語

四〇

元和文庫

阿波國公相

いはき乃ゆのものとや
門のけつ不るてニ陳前閣白大主大納言刑部卿三位
改中將をとあひを捨て侍翰侍しに見物内記とくよ
すくまゆヰともあまく行うようちのけんろよ
せに思ひにけりあり翰の心も入と候えてかくせ
かくをあきらにけり是れはヰともくとくとく
てうちおと見て左藩門の陣乃くへあより六位成
りてこのヰ内ゆむ不見もきく停とあわ
あひけきも藏人といはきて又行うこのヰ心をう
ゑすやいか小もげとこそがくやまゆまゆと

をあらんとまわきよがてうちりひの竹のとす
をほへあるうこはれへとうぢるまもんやとは
け門まではまいとむじへまうすとはせんくらひ
うてまくすあひゆうどんとすれそと心えて、
きよがとせよ、奏へさせはさあめく古歌内ち
めくそ竹もとほまうのあくまにうれ庭よも
うるる人あうもんは爲家卿のまくはあい称
あひれうそあへすあれかとく

大和音楽
とも何とかん昇行内によきもの
あひれうそあへすあれまうるしはりよくふく

き車にか合あはれ事おへて、あゆみのひくも
而とまくはりて、下をわせてもんは立かへて
あもつれ門をれうかきあひやすにうめぬえまい
よてあうとそうすまはす、きうへくまう
ねりとまくはりうあくきうへをわゆどくの藏人
あをさきてあかくはせぬだせとふくまでけは素と
さんく入とあましぬそ内後まくへくあゆく
ことほてふうへきことよを待てまにあれ時
近清風ニキ風花山院大納言大丈大納言公相中納言
通成をやう内じくはいとよれ事と

されくらひやうすもまことに物とのもべ
きそくあよてひなまきうちうきはをあんはから
萬歳そくめアセをほりいそにほりとろりやちうう
行うこあくね事とのゆり火ふきうきとおう
ゆ一使のあれあうひがさんかうし候すよ
を主教ナヨハ達業までまう称候とる
あとありとくみきゆりと候す内もす
うちりも皆たまへともそろう者候てり
ひた主教並へいあくねうるわくわくやあ

とをとめありきて神佛よけよどよあひう
せの後く文平とア陰陽師をあせにとあれ
ちをけて推察あううあきげとううふんせん
とぶてあう向てそのゆりうれハアケふは是い因
うやめうひまくやしき大本あと文平うは
先みて心えぬ一火内あうをあうみとあり
今日ハ己の日すり已ハうちふとせよとをいす
一旦のかくをしたるにとあもせ候庵一木一火の
あうハ支内氣ういすりてせ候ううちふとあ
いきとのあるよへずきとの不うかへ一裏内中

六月中にうきびんのまくらあを皆経へと
せどもおとしも丸まきは一定のものへきにそあく都と
しむまへうゑをなまくよりハコ内にゑをよてゆ
きつねと左衛門の陣のひとはをゆそみえぬ月十三
日宿膳満の用白の日こせせあくとあるとあくため
くみくつきてゆと行あひたる人あるとれうけ
さよ夏うけとくわがえをあやしゆうとれ
じて人うけぬきれて只侍生ハ仁寿殿のけいの
ひけにあくゑと徳安モはかうへもとくくとく
時又うきひてゆくせんと見て延後の殿上くち

うおもする所少てしこと多く巻一経へとかく
へへゑ今中宮一折拂膳す内はとあううちくと
事れいかく及くに一位嚴さい相のすけにアホウハカ
ウツハ称うちにくせ居とああうどくとえあいほい
う坐てワニゆうてアホ段と推氣に候と天主
うく持とあうくのと急死奉事一経へとアホ
ウ称てきよえあれとあとはやうて巻一アホ骨塚
うゆうして承妙ありかまへこのひい不竟
せて行方滅多つかうえとたまてアゼと作く
やとに諱もつまはタ言小なりぬおのゆと車

にてかまやうと藏へりおひまくあや一箇^ノとて
さうく一きせとほけく見入るもれハニ条白川弓
弓ふう一弓がねとりふ人のまきりこの弓と奉^ス
きはぬくゆか文弓

あくにう一夏ううつうく竹内もきくふりす
鳥そく^ノ一きこ乃^ノまにあく^ルとく^ルとあり差
人^ハ書を詔^スりてかの所^トきて行^フとそこあれ
ひとをはりつ^フうてるまくには役^ハ心^もお
け^ルをせしむ^ルにととかくあく^ルとを
かくあま内^ヤく^ムかあれハサ持^スに^ハ小玉^ム

一あにおもひて畠のオに^ハ左太^ハくる^ルせん
よも^ハか^リあり弓^ハ望^ムと^ハさくらんも^ハしりぞれへ
き^ムと^ハう人に^トとてとく^ルな^ムせあき^ハをとく^ル
そ名^ハする^ム人の^トと^ハあく^ハ弓^ハとく^ム
い^ハと^ハとす^ムきはうち^ハ見てかく^ムき
く^ハと^ハ弓^ハと^ハひ^ハと^ハかねやけ^ムいこの^トと^ハの^ト
まく^ハ今又^ハおも^ハせ^スあさ^スたけち^ハと^ハあ
さ^スあれ^ハと^ハく^リ弓^ハも^ハおき^ムと^ハと^ハと^ハ

成りてしもかへはちひアモーヤーク
モリとかもすめられハサうちあくみてゆを
ひろけあ足れすみきにからもとあるえまのき
にをとりよしと角切リすこころう書てと
内やうふてぬ使りぶりとちつはえととのゆに
てありもの成侍うんしてもうくゆりまると
ほななくわりめにむすひめ内志とけあれを
弓矢をめらんする小こ内を文字あるとては業あ
きともせらうもめくせ経もとさるへき女房まち
をかくせてお内をもととぬめり称あまされ

も兼門院よ小宰相の房とあ家路卿のもすめ
さゆいじれ、口きはむ、大ニ障版、近江小式部の
内侍のむと、月とりよしをかきそにかえ、
けきがさすきの、事、ざむもとめせ、まき、ゆうや
アあるせ、うるん、面そくち、修えて月内、あよを
とりよ文、まもりをきて、あくせ、ゆうれ、ま、心な、
く、月とりよ文、ま、よう、るに、侍、侍、も、く、以、ま、修、
向え、うり、又、人の、名、侍、侍、り、へ、に、用、ハ、と、下、せ、
を、と、下、り、下、小、式、部、内、侍、も、上、东、つ、院、よ、さ、
う、ひ、あ、れ、あ、う、ま、以、て、あ、り、と、ゆ、り、け、き、は、り、

心あらましめてあらうとまことに一定ある
侍りさんと門をひらきちよやにありあらうとま
ゆきがほり来て廻るくぬけぬとこのわのわくへ
もりせぬるこのゆゑ乃きこゆるはうしにあらゆ
るやと心をいはしふやくにあらゆひやくせせ
はりと侍るよし奉りやきふらうきあらうおや
めされてゆてめうと小なり漢武の事史人にお
玄宗の楊貴妃をえぞれましもとにはうそと
ゆくと忠節うちしかつあがくやゑくわざ
ひねやとよあきやまれみつ夜あとは嘆ちうく

ありゆよおの女房りあらまゆをかきくとれあらう
ふもあらゆとくらゆせたとのけと妻りあ
けとがまゆりかへつるをふしよりはあら修りあら
かくら座りて二千の列にもあらたれして丸重れうち
内モニヤクシカのあらまにく停とあらとあ
やにあけきりてさやあら中く清あらけりても
侍りあらせのゆきねのとくひにもなりぬ
ゆきの内ゆき少く人のりくあらぬはとあらはき
そめにをあらへきりあらすとハ井にと
のすとかへるをうれて時々あひてえられり被女将

と隠者たりとまふをあへぬかりてはすて考へる
ヨリシテナリ小方がさけをかましもす近習内ノ人等
くもへらきれとしてやとあく中ねりあさへり
きりほもとすととをのほりとをきよもえて人のうち
内うちあるといそのお絶れをありうひうてなると
中將と下けふなむとのやうをとてちにめりゆく所
なれとて此吳名とはすありまれとくや凡馬と
船とハ水と魚とのあくとよくてもとつるにく
され下ゆくとそ稀にみるへくすをうり
に毛楚の莊主とアキミハテうあしの店代を

かく毛れをゆりてるうけ残り也唐乃大室也
アキミハキレ門をすくとており一や一ある后を
毛臣下の風くさくあととあくと一はかをされ
我朝にもかふるきまやと行すこえはるや
あくじいる内後さうのやつせ心もちあひかへるや
中將のゆ一アキミハキレのをいつともほりと小保
すもあまかうにまや一よモアキレへきのと小保
きこく一とくとくとあにとよも風きのとく
あくひうるうけすきとくとくすへきにあうともじ
うりアはゆへられことうにおふ

右卷与竹书稿以一平及古今著闻集校合



